いなほ

令和４年９月３０日
令和４年度学校だより NO.29②
加古川市立平荘小学校

修学旅行に行ってきました（６年生）　NO.2

≪原爆体験講話を聞きました≫

修学旅行１日目、追悼記念館において、被爆された方（内藤さん）から原爆体験のお話を聞いてきました。子どもたちは、真剣にお話を受け止めていました。

『ベンケイガニ』は、私（内藤さん）の命の恩人です。

原爆体験の語り部（内藤さん）のお話

- 内藤さんは、父、母、２人の兄、　ご自身と弟、妹の７人家族でした。
- お父さんが満州に行くことになり、家族で夕食をとることになりました。思えば、この時が、家族での最後の晩餐となってしまったと。
- 1945 年８月６日の朝、８時 15 分。内藤さんは家の庭でカニを見ていたそうです。父、母も庭にいました。兄は、動員で広島の町に出かけていました。弟や妹は家の中にいました。その時、ピカッ、ドーン。内藤さんは、ちょうどその時、目の前にベンケイガニが出てきてしゃがんだ瞬間だったそうです。強烈な爆風で体が宙に浮き、目を開けることもできず、じっとうずくまっていたそうです。辺りは真っ黒で、やっと周囲が明るくなったかと思うと、建物はぺちゃんこで、ガレキの山となりました。町もぺちゃんこになり、あちらこちらから火の手があがりました。朝の青空が、まるで夕暮れ時の空になってしまったそうです。
- 強烈な熱線を浴びた父親は、やけどをおってしまいました。母は、必死の形相で家の瓦をはがしていました。鬼の形相のようで、内藤さんは怖かったそうです。それは、建物の下に、弟と妹がいたため、母親は必死に助け出そうとしていたのです。母親は弟と妹を抱え、父親と内藤さんと一緒に逃げました。
- 広島には７本の川が流れています。被爆し大やけどをおった人が水を求めて、川に入っていきました。皮膚が垂れ下がった人が行列になって水を求めていました。川には、亡くなった人がプカプカ浮いている状態です。死体でいっぱいでした。
- 結局、内藤さんの家族は、内藤さんしか生き残ることができなかったそうです。
- 内藤さんは、「原子爆弾が憎い」「戦争が憎い」「二度と核兵器を使わない世界にしたい」と訴えられました。
- 内藤さんは、長い長い間、この８月６日の出来事を家族にも話さなかったそうです。しかし、終戦から 77 年経った今、「このままではいけない」と立ち上がり、被爆当時の悲惨な状況を伝え、平和な世の中を築く活動をされていると伺いました。

☆内藤さんは、６年生の子どもたちに、「学校に帰ったら、このお話を他の人に伝えていってほしい。」「自分の家族を助けられなかった悔しさや悲しみ、たった一発の原子爆弾が多くの人々の人生をかえてしまったこと等、多くの人に伝えてほしい。」と訴えられました。

《平和記念資料館の見学》

子どもたちは、資料館の中で、佐々木禎子さんの折り鶴やしんちゃんの三輪車、地球平和監視時計等を見学し、平和について、目で見て、耳で聞いて、心で感じて学習を進めました。

《呉大和ミュージアムの見学》

戦艦大和と平荘小学校の大きさを比べています。当時の造船技術についてもお話を伺いました。

修学旅行の行きのバスの中で、第二次世界大戦末期の広島・呉が舞台になっているストーリーの『この世界の片隅に』の DVD を視聴しました。呉での学習に多いに役立ちました。

実物の 10 分の 1 の大きさの戦艦大和です。子どもたちが小さく見えます。

子どもたちは、班行動で、平和学習を進めました。